遥かな国の冒険譚

お姫様と猫・三つの果実

作　雪村月路　　絵　なぎ

お姫様と猫

　大きくて賑やかな街の外れにある、小さくて静かな宿で、フィリシア姫は、ぼんやりと目覚めた。あまり体調がよくない。まだ眠いし、出かけることを考えると憂鬱だ。
　目覚める場所が城の自室でないことには、もうだいぶ慣れた。旅の毎日も、わくわくして楽しい。でも、弱っている日には、少しだけ城が恋しくなる。こんな日は、自分の部屋で、静かに丸まっていたい・・・。
　それでも、彼女は心を奮い立たせて、起きて、部屋の窓を開けた。すがすがしい朝の陽射しを浴びると、ほのかに気持ちが明るくなった。できるだけ頑張ろう。ただ、旅の仲間たちには、今日はあまり移動しないように、お願いしてみよう。
　波打つ青い髪を丁寧に梳き、いつもよりゆっくりと身支度をして、ドアを開けて部屋の外に出てみると、廊下に、月色の長い髪をした若者が立っていた。フィリシアを見て、セレンは、にこ、と笑った。
「おはよう、お姫様」
「おはようございます、セレン。もしかして、私を待っていらしたの？」
「そう。確かめようと思って。君は今日、本当は出かけたくないよね？」
「えっ」
　フィリシアはびっくりした。それから、ためらいがちに、うなずいた。
「ええ・・・その・・・そうなの。・・・どうして？」
「昨日から、調子が悪そうだったから。女性との付き合いが多いせいで、なんとなく分かるんだ、そういうの。いやだったら、ごめんね」
　やさしい口調で、さらっと言われた。こんなふうなら、別に、いやではない。フィリシアがそう言って礼を述べると、セレンはほっとしたようだった。
「よかった。そうしたら、無頓着な王子様たちには、ぼくから話しておくよ。ゆっくり休んで。食事、いま持って来てあげる。そんな顔しないで、大丈夫だよ」
　ふんわり笑ってくれたセレンの言葉に甘え、フィリシアは部屋に引きこもることにした。
　運んでもらった食事は、ゆっくり食べた。あまり食欲はないけれど、食べておいたほうがいいだろう。パンと、ミルクと、シチューと、サラダ。ふと視線を感じて窓のほうを見ると、ひらいた窓のところに、きれいな白い猫がいて、金色の瞳でこちらを見ていた。
　フィリシアは、小さな声で「にゃおん」と呼びかけた。白い猫はフィリシアを見つめながら、可愛らしい声で「にゃおん」と返事をした。フィリシアは思わず微笑んだ。
「猫ちゃん、ミルク飲む？」
　コップに入っていたミルクを皿にあけて床に置き、顔を上げると、猫は窓枠からこちらを見たまま、「にゃあ」と言って、動かない。
「何か気に入らない？　ごめんなさい、私、猫の言葉は話せないのよ」
　フィリシアが言うと、白い猫は、可愛らしい声で、
「あら、そうなの？」
と言った。窓枠から、しなやかに飛び降りて、ミルクの皿の前まで歩いて来た。
「それじゃ、私が人の言葉で話すわね。特別よ。ミルクはいただくわ。ありがと」

おいしそうにミルクを飲む白い猫を、フィリシアはしげしげと眺めた。猫が流暢に人の言葉をしゃべったような気がしたが、夢でも見ているのだろうか。
白い猫は、ミルクの皿を空にすると、満足そうに目を細めてグルグルと喉を鳴らした。フィリシアは、おそるおそる聞いた。
「どうして、人の言葉が喋れるの？」
「そりゃあ、人と一緒に長いこと暮らしているもの」
と、猫は何でもないことのように、
「あなただって、猫と一緒に長いこと暮らしたら、猫の言葉が話せるようになるわ。それと同じことよ」
そうかしら？とフィリシアは考えてみたが、よくわからなかった。それで、
「人の言葉を話す猫に会ったのは、あなたが初めてよ」
と言ってみた。白い猫は前足を舐めながら、
「みんな、話せないふりをしているのよ。そのほうが、何かと都合がいいから」
「あなたが私と話してくれるのは、どうして？」
「ちゃんと猫の言葉で、こんにちは、って言ってくれたから。ミルクも分けてくれたし。あなたのような人を探していたの。実は――」
言いかけて、猫は口を閉ざし、扉のほうを見た。トントンと控えめなノックの音がした。
「・・・フィリシア？」
静かな声は、ゼラルドのものだ。フィリシアは、重い体を引きずって、ドアを開けた。
「休んでいるところを、すまない。妹が障りのときに飲んでいた薬があったから、渡しておく。少し眠くなるが、楽になるだろうと思う」
黒髪の若者が、薬を一包みくれて立ち去ったあと、猫はフィリシアを見上げた。
「あなた、具合が悪いのね。そういえば、顔色が悪いわ。気付かなくて、ごめんなさい」
「大丈夫よ。何を言いかけていたの」
「その前に、薬、お飲みなさいな」
猫の声が優しかったので、フィリシアは水差しの水で粉薬を飲んだ。猫は話を続けた。
「今日、何匹かの猫が、あなたを訪ねてやって来るわ。あなたが寝ていたら、起きるまで待つわ。あなたは、私に話しかけたのと同じように、一言、話しかけてあげてほしいの」
「同じように？・・・にゃおん。って？」
「そう！　すばらしいわ。きっとよ。お願いね」
白い猫は、嬉しそうに念を押し、ひらりと窓枠を跳び越えて、行ってしまった。フィリシアは、薬が効いて眠くなったので、ベッドに横になり、丸くなって、うとうとと眠った。
ときどき目を覚ますと、部屋の中に猫がいて、床に座ってフィリシアを見ていた。猫は、黄色かったり、黒かったり、ぶちだったり、縞模様だったりしたが、そのたび、フィリシアは「にゃおん」と声をかけた。猫はみな、「にゃおん」と返事をしてから、はっとしたようにピンと耳を立てて、ひらりと窓枠を跳び越え、外に出て行くのだった。
夕方頃、フィリシアが目覚めると、部屋には、あの白い猫がいて、金色の瞳でフィリシアを見つめていた。フィリシアが体を起こすと、猫なりに姿勢を正して、可愛らしい声で、
「どうもありがとう。必要なことは、全部済んだわ」

と言った。
「そうなの？　お役に立てたなら良いのだけれど」
「すごく役に立ったわよ！　それでね、きっと明日、あなたに来客があるわ。その人は何か私の話をするかもしれない。でも、私が人の言葉を喋れることは、内緒にしておいてね」
「わかったわ」
　フィリシアが頷くと、白い猫は笑って、窓枠を跳び越えて去って行った。
　翌朝。
　前日より体が楽になったので、食堂の朝食を食べに行くと、陽光色の髪をした王子がいた。
「フィリシア。もう、その、大丈夫なのか？　すまない、ぼくは、まったく気づかなくて」
　ぎこちなく言われると、こちらも気まずいのに、と思いながら、
「ありがとう、フルート。昨日よりだいぶ良いのだけれど、もし叶うなら、もう少し――」
「もちろん！　体調が良くなるまで、ゆっくり休んでくれ」
　食事のあと、姫君が部屋に引っ込むと、じきに、セレンが呼びに来た。
「ごめんね、フィリシア。君を訪ねて、来客があるんだ。出られそう？」
「どのような方？」
「身分の高そうな美人が、宿泊中の『青い髪の姫君』に会いたい、と。心当たりはある？」
「少しだけ。着替えて行きます。お客さまに、お待ちいただいてください」
　フィリシアは、荷物の中から、おとなしい藍色のドレスを取り出して着替えた。宿の外に出て行くと、見るからに高貴な女性と、数人の従者がいて、皆が「おお」とどよめいた。
　フィリシアは、その人々に面識がなかったので、「はじめまして」と挨拶をした。高貴な女性、おそらくは異国の姫君も、挨拶を返した。
「はじめまして。でも、本当は、お会いするのは初めてではありません」
　異国の姫君は微笑んで、続けた。
「私たちは、ひと月ばかり前に、南の国から旅をして、この街を通りかかりました。街の入口で、白い猫に会い、従者が棒で追い払いました。祖国では、猫は災厄を招くと言われていたので・・・。猫は、何かニャーニャーと遠くから鳴きたててから去って行きました。気が付くと、私たちは、自身が猫の姿になっていました。
　魔法を解くには、人間から、猫の言葉で『こんにちは』を言ってもらうことが必要でした。私たちにはそれが分かりましたが、人間の言葉を忘れ果て、誰にも伝えることができません。そうこうするうち、元は人であったことさえ、夢と思われるようになりました。
　そうしたら、きのう、あの白い猫が現れて、この宿に泊まっている青い髪の姫君を訪ねるようにと言うのです。私たちは、あなたの部屋を訪ね、あなたから猫の言葉で『こんにちは』をいただいて、自分たちが人であったことをはっきり思い出しました。
　おかげさまで、今朝の日の出とともに、みなが人間に戻ることができました。１人も欠けてはおりません。みな、あなたのおかげです。どうもありがとうございました」
　姫君と従者たちは、フィリシアに向かって、深々と頭を下げた。そして、ひと月の空白を取り戻すべく、急いで旅立っていった。
　数日後、フィリシア姫も、仲間たちとともに街を発った。
　街の門を出て、ふと振り返ると、門のところに白い猫が座っていた。フィリシアを見る

と、ゆっくりまばたきして、「にゃあ」と鳴いた。
　フィリシアも、ゆっくりまばたきして、「にゃあ」と言った。フルートが驚いたようにフィリシアの視線を追い、フィリシアと猫を見比べながら、「知り合いか？」と真顔で言った。
「そうよ、知り合いなの」
　フィリシアが言ったのが聞こえたのだろうか、白い猫は笑ったようだった。
　そして、猫は、満足そうに、街の中へと戻って行った。

（完）

三つの果実

　遠く聖泉＜真実の鏡＞を目指す一行は、あるとき、小さな泉のほとりに三本の樹の立ち並ぶところを通りかかった。
「ここで一休みしよう」
と、フルート王子が言って、四人は馬を下り、馬に水を飲ませ、自分達も一息入れた。
　三本の樹には、よく見ると、人の手の届くところに果実がなっていた。それぞれ異なる種類で、一本目の樹には白い梨のような果実。二本目の樹には黄色いオレンジのような果実。三本目の樹には黒い杏のような果実が、おいしそうに実っているのだった。
　四人はめいめい、樹から果物をもいだ。ところが、フルートが白い梨にナイフを当てると、梨はひとりでに割れて、中から白い小鳥が飛び出して来た。何かしきりにさえずる小鳥の声を聞いて、フィリシア姫が驚いたように、
「北方の言葉だわ。水を飲ませてほしいと言っているみたい」
と通訳した。フルートは小鳥を水辺に連れて行って、小鳥が水を飲むのにまかせた。
　次にフルートがオレンジにナイフを当てると、これもまたひとりでに割れて、中から黄色い小鳥が飛び出して来た。さきほどとは異なる響きでしきりにさえずる小鳥の声を聞いて、セレンが、
「西方の言葉だね。水を飲ませてほしいと言っているよ」
と通訳した。フルートは小鳥を水辺に連れて行って、小鳥が水を飲むのにまかせた。
　最後にフルートが杏にナイフを当てると、みたび果物はひとりでに割れて、中から黒い小鳥が飛び出して来た。前の二羽とは異なる響きでしきりにさえずる小鳥の声を聞いて、ゼラルドが、
「南方の言葉だ。水を飲ませてほしいと言っている」
と通訳した。フルートは小鳥を水辺に連れて行って、小鳥が水を飲むのにまかせた。
　フルートの一部始終を見ていた三人は、自分達のもいだ果物からも小鳥が出るのかと用心しながらナイフを当ててみたが、そんなことはなく、すべて中身の詰まった本物の果物だった。また、フルートが疑心暗鬼になりながら、樹から新しく果物をもいでみると、これも今度は普通に中身が詰まっていた。一行は珍しい果物を食べながら休憩した。
　すると、水を飲んでいた小鳥たちに変化が訪れた。三羽の小鳥は、もやもやと姿を変え、いつしか三人の姫君になった。白い小鳥は、雪色の肌に白銀の髪を持つ姫君に。黄色い小鳥は、バター色の肌に黄金の髪を持つ姫君に。黒い小鳥は、黒檀色の肌に黒曜の髪を持つ姫君に。小鳥たちの出て来た果物の皮も、地べたに落ちていたのが、むくむくと姿を変え、梨の皮は白い馬に、オレンジの皮は黄色い馬に、杏の皮は黒い馬になった。
　三人の姫君は、三人とも、いずれ劣らぬ美しい姫君だった。聞き出したところによると、どこかの魔法使いが、いたずらに魔法をかけて放置したものらしい。これからどうするのか尋ねてみると、三人の姫君は、自分の国に帰るのではなく、この国の王に会いたいと話した。王には三人の息子があり、運が良ければ自分達を妃として迎えてくれるのではないか、という。
　予定にはなかったが、一行は行きがかり上、姫君達を王城まで送り届けることにした。旅人たちが三人の姫君を連れて王城の門の前まで来ると、驚いたことに、冠を戴いた国王

自らが門のところに立っていた。
「ようこそ、旅の方々」
　王は一行を歓迎し、城の中に招き入れ、三人の息子に引き合わせた。三人の王子は、みな美しく、健康で、誠実そうだった。王曰く、
「昨日、旅の占い師が城を訪れ、あなた方が来ることを教えてくれました。姫君方を王子たちの花嫁に迎えるにあたっては、姫君方の美徳を見逃すことのないよう、特別な物を用意してくれました」
　王が大事そうに取り出したガラスの瓶には、あまりこの場には似つかわしくないものが入っていた。三匹の大きな尺取り虫。
「白い尺取り虫は、気立ての良さを。黄色い尺取り虫は、賢さを。黒い尺取り虫は、美しさを測ってくれるのです。お三方、一列に並んでくださいますか」
　三人の姫君は一列に並んだ。
「さて、女性でないと瓶から虫を出せぬそうなのだが・・・」
「では、私が」
　尺取り虫をこわがらないフィリシアが瓶を受け取り、三人の姫君の隣で、瓶を逆さに振った。尺取り虫たちは、ぽとりぽとりと地面に落ちた。
「これでいいのかしら？」
「大丈夫。君はこっちにおいで」
　フルートに呼ばれて、フィリシアが離れると、尺取り虫たちは尺を取って進み始めた。白い尺取り虫は、白銀の髪をした姫の前で止まって伸びあがった。黄色い尺取り虫は黄金の髪をした姫君の前で止まって伸びあがった。黒い尺取り虫は黒曜の髪をした姫君の前で止まって伸びあがった。
　王は手を叩いて喜び、三人の王子はそれぞれ、
「では、私は、もっとも気立てのよい、あなたを花嫁に迎えよう」
「では、私は、もっとも賢い、あなたを花嫁に迎えよう」
「では、私は、もっとも美しい、あなたを花嫁に迎えよう」
と、花嫁を選ぶことができた。花嫁たちも満足しているようで、城の通訳たちは大忙しだった。
　四人の旅人は、幸せいっぱいの城をあとにして旅に戻ることになった。国王は、
「あなたがたのおかげで、美徳ある姫君方を見逃さずに済みました。ありがとう」
と、旅の物資等をいくばくか持たせてくれた。
　・・・城を離れてから、フルートとセレンは、こっそり言いあった。
「王は見逃したな」
「見逃したね。見逃された本人も気づいてないけど」
　――地面に落とされた三匹の尺取り虫は、あのときフィリシアの足元で、三匹そろって懸命に伸びあがっていたのである。

（完）

甘い、すっぱい

　まだ日が落ちるまでには時間があったが、次の村は遠いのだそうだった。
　今日は村外れの空き家に泊めてもらうことにして、日没まで自由行動になった。

　いつものように、最初にゼラルドがふらりと姿を消した。誰にも見られない静かな場所で、黒髪の王子は聖札を使ったり、術の鍛錬をしたりするのだ。
　次いで、フルートとセレンが、明日の道を下見して来るからと、馬の荷を軽くして二騎で出かけて行った。
　誰について行っても邪魔になるだろうと思ったフィリシアは、「行ってらっしゃい」を言って、一人で居残った。逆に言えば、一人で残らせてもらうことができる程度には、みんな旅に慣れて来て、姫君にも多少はひとりの時間が必要だし、非常識な無茶もしないだろうと、信用してくれるようになったということだ。
　今晩泊まらせてもらう空き家を片付けておこうかしら、とも思ったものの、よく晴れていたので、青い髪の姫君は、せっかくだから村の周りを散歩することにした。

　ぐるりと村を一回りしてから、土手を上って、今日やって来た道に出てみた。明日はこの道を東に向かう。
　東のほうに体を向けたフィリシアは、少し離れたところに、道沿いに立ち並ぶ木々を見つけた。その枝ぶりから、もしかしてと思って歩み寄ってみれば、思った通り、ほとんどがティルという果物の木で、いくつも実をつけていた。
（でも確か、この季節に実る種類は、すっぱいのではなかったかしら）
　思いながら見上げると、それでも、手の届く範囲は既にもぎ取られているようだ。
（お砂糖か蜂蜜に漬けておいたら、美味しくなるのだけれど・・・）
　この村で砂糖や蜂蜜が手に入るかどうかは分からない。だが、もぎ取られている実があるということは、食べている者があるということだ。そう思いながら、フィリシアは木の根元に視線を下げて、目をぱちぱちさせた。そこには、持ち手にロープを結びつけた、小さな手持ちカゴがあった！
（収穫用、よね？　共用のカゴ、よね？　ということは、つまり・・・）
　姫君、というより、今は身分を伏せたおてんば娘のフィア、は、左右をきょろきょろと見てから、カゴを拾い上げ、持ち手を腕に通した。
　頑丈そうな木を選んで。
　幹に手をかけた。

　何の苦労もなかった。するすると器用に木を登ったフィアは、控えめにいくつかの実をもいでカゴに入れ、あとは太い枝の根元近くに座って、しばらく見晴らしを楽しんだ。
（子供の頃なら、もっと高くまで登れたけれど。今はもう、体が重くて無理ね・・・）
　流れる雲を見ていると、徐々に日は傾いて、西の空は美しいオレンジ色に染まっていく。ずっと眺めていたかったが、足元が暗くなる前に降りなければならないから、一番星を見つけたところで撤収することにした。まずは、ロープのついたカゴが先だ。

　カゴを下ろしていると、下から声をかけられた。
「おーい、フィア！　セレンに見つかったら叱られるぞ！」
　戻って来たフルート王子、というより、フィリシアをフィアと呼ぶなら王子のほうも、身分を伏せたルークと言うべきか。ともかく、金髪の若者は手を伸ばして、果物の入ったカゴを受け取ってくれた。
「いま降りるから、ちょっとあっち向いてて！」
「いいけど、落ちるなよ！」
　フィアは一歩ずつ慎重に降りて、とん、と地面に帰り着いた。
「カゴ、ありがとう。セレンは一緒じゃなかったの？」
「途中で置いて来た。こいつが走りたがったから」
　ルークの横では、白馬がぶるると鼻を鳴らしている。抜きんでて俊足の馬だ。
　カゴの中を検分したルークは、率直に、
「これ、すっぱいんじゃないか？」
と言う。フィアは答えて、
「砂糖漬けか、蜂蜜漬けにしようと思って。あなたたちも食べるでしょ？」
「飲みものに入れたいな。砂糖漬けでも、すっぱいのでも。でも、もう少し向こうに」
　カゴをフィアに預け、すたすたと歩いて行って、ルークは一本の木の下で跳び上がり、ひとつ実をもいだ。
「ほら、すこし甘いやつ。このまま食べられる」
　種類の違うティルの実を、カゴに入れてくれた。フィアは目を丸くした。
「ありがとう、気が付かなかったわ。こっちを取れば良かったかしら・・・」
「砂糖漬けにするなら変わらないだろ。けど、こないだ思ったけど、君はさ、こんな感じだよな」
　ルークは同じようにして、もうひとつ取り、きゅっと拭って、皮ごとかじりつく。
「こんな感じって？」
「甘すぎなくて、さっぱりした感じ」
「えっ？　えーと・・・えーと・・・ありがとう」
「うん」

　ほどなくしてセレンが戻って来て、ゼラルドも帰って来て、みんなで簡単な食事をしたあと、フィリシアがお茶を入れた。
　お茶の中には、切り分けられた、甘くてすっぱい果物が一切れずつ入っていたが、どこの王女様が木に登って取って来たのかは、フルートとフィリシアだけの秘密なのだった。

（完）

遥かな国の冒険譚
お姫様と猫・三つの果実
http://p.booklog.jp/book/102355

著者: 雪村月路
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile
ブログ：http://snow-moon.cocolog-nifty.com/

絵: なぎ
ブログ：http://konpeito-lupi.cocolog-nifty.com/

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/102355

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/102355

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

遥かな国の冒険譚

始まりの物語・風の贈りもの

http://p.booklog.jp/book/97421

シリーズの読み始めに適した２編を収録。
リーデベルクの王子フルートと、クルシュタインの王女フィリシアの、
旅の由来と、道中の１ページ。

遥かな国の冒険譚

火の鳥

http://p.booklog.jp/book/96700

フルート、フィリシア、セレン、ゼラルドの一行は、旅先で、
さわると熱い卵をひとつ、手に入れたのだが…。

遥かな国の冒険譚

逃避行

http://p.booklog.jp/book/99542

聖なる国の第一王子は、従者ひとりを連れて出奔したのだった。
ゼラルドが祖国をあとにした顛末を描く一編。

遥かな国の冒険譚

光り姫

http://p.booklog.jp/book/96386

王女フィリシアが、妖精を統べる＜光り姫＞ミルガレーテと
初めて出会った、夏の日のこと。

遥かな国の冒険譚

化身の魔女

http://p.booklog.jp/book/96559

旅の途中、ルークとセレンは、道案内の少年と行動を共にする。
魔女に出くわさないように案内する、と少年は言うのだが…。

遥かな国の冒険譚

夜を越えて

http://p.booklog.jp/book/97502

囚われの巫女を救うことはできるのか。
紅い耳飾りの導く先で、フルートとゼラルドの見たものは。

～　作者より　～

猫好きな方からご好評いただいている「お姫様と猫」。

有名な童話「三つのオレンジ」へのオマージュである「三つの果実」。

メルヘン色の強いお話ふたつを切り出してみました。

日常の１ページを描いた「甘い、すっぱい」も、おまけで。

こういうのもいいよね、と、お楽しみいただければ幸いです。

（雪村月路）

～　表紙を描きました　～

日ごろ頑張るお姫様に、ゆっくりのんびり休んで欲しくて

気づくとこの一枚を描いていました。

日常に疲れてしまった方たちにもぜひ

お話たちとともに息抜きして行って欲しいなと思います。

しゃくとりむしの愛くるしさは猫にも負けない…

…なあんて発見が、あるかもしれませんよ。

（なぎ）